
ささゆり物語

憂唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ささゆり物語

【コード】

N9819Z

【作者名】

憂唯

【あらすじ】

片想いの男の子が、その思いを伝えるまでのお話

その1

中学校のグラウンドを、教室の窓から見下ろしているおれは野村ミズキ。只今、担任のSTの長さにつんざりしているところだ。

今日は先生たちの学習会で午前終了だというのに・・・早く帰って飯食いたい。

ため息をついたそのとき、かすかにピアノの音色が聞こえ、おれは頭を上げた。

…アイネ・クライネ・ナハトムジーク。作者は確か、モーツァルトだったか。

STが終わり、おれは礼もそこそこにかばんを取る。「一緒に帰るか？」と声をかけられたが、「呼び出された！」と断る。

その言葉は本当だ。このタイミングでピアノを弾いてる奴は1人しか思いつかない。そして曲のセレクション。おれに来いと言っている以外に何かあるなら教えて欲しい。

渡り廊下を通り、階段をのぼる。音楽室に着くころには曲は終わりを迎えていた。そつとドアを開けると同時に、最後の音が伸ばされる。

おれは手を叩き、「流石だ」と一言。その言葉に「ありがとう」とにつこり返す彼女は花野ささゆり。おれの幼馴染だ。

「よかった、来てくれた」

「ささゆり、今日音楽室入って良かったのか？ 先生は？」

「二人で掃除するってことで入れてもらった。ね、先生」

「ささゆりちゃんの頼みだからね」

と、中年の音楽の先生が準備室から顔を出す。ささゆりはピアノのいすからおり、先生から二本の箒を受けとった。

「二人なのに突っ込んでいいか？」

「ダメに決まってるでしょ」

諦めて箒を受け取る。昔からささゆりはこんな感じだ。ささゆりとは、幼稚園からの付き合いだ。おれの母親のピアノ教室に来ていて、あまりに上手く弾くので反抗心を抱いて・・・というのが始まりだった。

そういえば、何で呼ばれたのか訊いてない。もし掃除だけとかだつたら・・・それでもいいか。

「ささゆり、用があるんじゃないか？」

「ああ、今日うちに来る？ って訊こうかなって」
思わず絶句。いろんな意味で。

「でも、嫌だよ。彼女さんいるし」

おれはため息をついた。箒に体重をかけ、たるそうに声を出す。
「とつくに別れてる」

「えっ？ そういやなんか聞いたような。でも、もう中学生なんだし、嫌じゃない？」

おれはもう一回ため息をついた。

おれはささゆりが好きだ。幼馴染とか、友達とかじゃなく、女の子として好きだ。いつからかは判らない。気づいたら好きだった。

でも、当然の如くささゆりは気づかない。

友達だから、ってこともたくさんあるけど、いつまでも？幼馴染？は正直つらいところがある。

おれは少し勇気を出してみることにした。

「別にいいだろ、？幼馴染？だし？」

一番使いたくない、一番使い勝手がよく、そして正確な理由。そんな複雑なおれの感情は露知らず、ささゆりがにつこり笑う。

「そう？ よかった。じゃ、さつさと掃除終わらせて帰ろう」

「おれはやらずに済んだはずなんだがなあ」

その嫌味は、しかしささゆりの耳に入ることにはなかった。

それから一時間と少しあと。おれはささゆりの家の近くでうろろしていた。少し早く来すぎたかな、と思って、少し時間をつぶし

ているのだ。

小さい頃は近いこともあってしょっちゅう遊びに行っただが、中学生になり、おれに彼女ができ、今回はかなり久しぶりだ。おまけに片思いの相手。ドキドキはなかなか止まらない。

昔はそんなことなかったよな。母さんに渡されたお菓子持って、今日は二人で何弾こうとか考えながら、この道を歩いてた。

・・・そうだ、お菓子持って行こう。と、近くのコンビニに足を向ける。お菓子を持っていったら、昔みたいに喜んでくれるだろう。だが、いざコンビニに行って悩んだ。ささゆりはどんなお菓子が好きだっただろうか、とお菓子コーナーをうろろする。

確か、スナック系は好きじゃなかった気がする。手が汚れるから。ふと横を見ると、105円コーナーがあった。よし、ここから選ぶ。

そして買ったのは、ポッキー。チョコとイチゴの二つ、210円也。ビニール袋を初めてのおつかいみたいに握り締めて、ささゆりの家に向かう。

そのままの勢いで、インターホンを押す。

ピンポン。ガチャ。

「お、ミズキ。遅かったね」

ささゆりがにつこり顔を出した。家に招き入れられながら、ビニール袋を渡す。

「これ買っていたから。ハイ」

「あ、ありがとう。後で食べよ」

と、ささゆりは二階へ上がって行く。おれはそれについていく。久しぶりのささゆりの部屋は、おれの記憶と違っていた。シックな本棚。大人びたカーテン。きちんと整頓された机。唯一記憶と変わらないのは、部屋の隅の、ささゆりのアップライトピアノだ。ささゆりは机にポッキーの入ったビニール袋を置くと、本棚の3段目を指でなぞった。

「ミズキ、今日はなに弾きたい？」

「へ？弾く？」感慨深くピアノを見ていたおれは、突然の問いを聞き返した。

「うん。ミズキはなに弾きたい？」

「いや、おれは弾かないよ。最近弾いてないし。おれのダメなの聴くよりさ、ささゆり弾けよ」

「え〜。私、ミズキの聴きたかった。一緒に弾きたかった」

そう言っただけを尖らすささゆりに、「急にはムリだ」と言っただけでもらう。

「次は絶対だよ」それにとりあえず頷いておく。

ささゆりはそれに納得したのか、ポツキーの袋を派手に開け、二三本同時に口に入れた。そして一本おれによこした。

「じゃあ、私何弾こうかな」

ぼき、といい音を立てつつ、ささゆりが思案する。おれは「楽しい曲がいい」と、一応意見する。

「楽しい曲ねえ。あ、これどう？」

と、スコアを取り出し、ピアノを開けると、早速弾きだした。

弾む音がおれたちの周りの空気を踊りだす。ジ・エンターテイナー。いかにも楽しそうに弾く彼女におれも笑顔になる。笑いながらもささゆりのきれいな両手は鍵盤をせわしく躍り続ける。昔はスタツカートが付いているとリズムがとりにくいと聞いてたけど、その辺も克服したみたいだ。右手は小さく軽やかに舞い、左手は白の黒を駆け回り、曲をより盛り上げる。

チャン。彼女のショーが幕を閉じる。おれは手をたたき、「上手くなっているんだな」と一言。

「へへ、ありがとう。ああ〜、なんか緊張したっ」

そう言っただけでピアノをチャンチャカ叩き鳴らすささゆり。照れ笑いはあるときのまま、変わらず可愛い。

「その曲どんな歌になるんだ？」

首を傾げながら、ささゆりは左手を鍵盤に乗せると、右手で作られていた音を曲へと変えていった。

「うん。久しぶりに仲良しの友達に会えたけど、久しぶり過ぎて緊張してあまりお話できなかった感じの歌かな。どうしたらいいかな？」

ピアノから両手を離すと、ささゆりはこちらを再度見た。おれはポツキーをくわえ、少し考えてから答えた。

「残念だな。だけど、やっぱり久しぶりに会えて嬉しいんじゃないか？」

そしてもう一本。やっぱり定番ってうまいな。

ささゆりは「私も食べる」とピアノのいすからおり、ポツキーと五線譜のノートをとった。

それから、おれたちはポツキーを友に曲づくりを楽しんだ。おれは彼女の試し弾きに頷いたり、ここが足りないと言っていただけが、それに丁寧な反応をかえすささゆりがまた可愛いのだ。ああ、幸せよく解らないがなんとなくありがとう。

しかし楽しいときは長く続かないものだ。

「あ、もうこんな時間！そろそろ親帰ってくるかな」

もうそんな時間かよ、と愕然とする。もっと一緒にいたいのに。・

・だが、親が帰ってくる前に帰ったほうがいいだろう。

「じゃあおれ帰るわ」

それをささゆりが「待って」と止める。

・・・ハイ、心臓がバクテン中。

「今度一緒に弾くから、練習してきてよ。何がイイ？これは？」

あ、心臓こけた。

でも、一緒に弾こう！また来てね。だよな？期待していいよな？

「ラ・カンパネラ、連弾バージョン。私が編曲したんだよ」

「・・・おれのようなへたくそにそれ持つてくるって、嫌味ですか？ささゆりについて行けません」

「確かにそうだね」と笑うささゆり。ささゆりはウソというものを覚えたほうがいい。だが、そこが彼女のいいところだ。

「じゃ、これどう？ラデツキー行進曲」
まあ、このくらいなら。多少心配が残るが。おれは楽譜を受け取った。

「じゃあ、また明日ね」

玄関で手を振るささゆり。さよならに、何も進展しなかった心惜しさを感じるが、また今度、連弾をするために二人であえるだろう。おれはそれまで全力で練習しようと思うのであった。

その2

明日学校終わったら家来てね

昨日届いたそのメール。その福音に朝からドキドキしていたおれの名はミズキ。只今、幼馴染ささゆりに絶賛片思い中の十五歳だ。そのささゆりからの誘いのメールである。恐らく前回やりたと言っていた連弾をやるう、ということだろう。

ウキウキしながら校門を出る。今日は職員会議で、部活はなし、騒がしい下校風景が広がっていた。早く帰ろうと、一人足早になっ
ていたおれは突如声をかけられた。

「ミズキ。へへ、会えたね」

ささゆりである。半そでのセーラー服がまぶしい。

「このまま家に来てよ。帰ったほうがいいならいいけど」

「ああ、別に構わない。楽譜はあるよな？」

ささゆりが元気にうなづく。まったく、こいつはおれをどうにかしたのか。

そんなことを思いつつ、おれはささゆりと共に素敵な代わり映えのしない通学路を行くのであった。

次の日。おれは朝からずっと上機嫌だった。それも当然。短い間ではあるが、好きな女の子の家に行き、連弾までしたのだから。

連弾の内容は、ささゆりについていくのが必死で、あまり覚えてない。いや、ささゆりはおれに合わせてくれていた。おれの記憶が少ないのは、隣にささゆりがいるという緊張のせいだろう。

「おいミズキ。次選択授業だぞ。いかねえのか？」

もうひとつの上機嫌の理由は、今日選択授業があるということだ。選択とは、文字どおり自分のやりたい科目を選んでやる授業である。おれは音楽選択で、ささゆりもそうである。ささゆりとは違うクラ

スだが、学年でやる選択では一緒に授業を受けられるのだ。

「ああ、行くか」

音楽室まで行くと、「ミズキ！」と高い声で呼ばれた。思わずため息をつきたくなるのを堪える。

「今日先生出張でいないから自習だつて！」

そう言いつつ近づいてくるのは、大出マリ。おれの元カノだ。

「マジか。ラッキー」

思わず冷たくなってしまっただが、しょうがないと思える。マリもそんなに気にしてないようだ。

「ミズキってピアノ弾けたよね？ 弾いてよ」

「マリも弾けるだろ、マリ弾けよ」

そう言いつつ、さっと教室を見、ささゆりを探す。ささゆりは窓際でぼんやり外を見ていた。らしくない。そばに行きたいが、やはり友達や元カノの前でははばかられる。

「ねえねえ、ミズキ！」

マリに呼ばれ、おれは「なんだ？」とマリのほうを見る。マリはピアノのいすに座り、手招きしていた。

「何弾こうかな？ ねえ、ミズキは何がいい？」

「何でもいいよ。マリの得意なのでいい」

「りよ〜かいっ」

マリの右手が鍵盤を流れるように踊りだす。続いて左手がゆっくり入ってくる。子犬のワルツ。誰しもが一度は聞いたことのある曲だ。

周りの歓声を聞き、気分よく弾くマリ。自分流に早くしたり遅くしたりして、まさしく自分だけの演奏をこなすマリに、流石だなと素直な思いが湧き上がる。

曲が終わり、「すごいねー」などの歓声を背負い、マリがおれにつこりと笑いかける。いつになく積極的のマリが、「次はミズキ弾いてよ」とせがむ。しかし。

「ささゆりちゃんもピアノ弾けるんだよね？ 弾いて見せてよ」

ひとりの子がそう言ってささゆりを呼ぶ。「え?」「とささゆりは素っ頓狂な声を出しつつも、こちらに来てくれた。

「別にいいけど、マリちゃんみたいに上手じゃないよ」

マリが人形のように立ち上がり、いすを明け渡す。あまり快く思っていないのか、顔が少しこわばっている。なにかあったのか?その考えがまとまらないまま、ささゆりが弾き始めた。

・・・有名すぎるその調べ。エリーゼのために。ベートーヴェンが、愛する女に捧げた曲。しかし、ささゆりが弾くと、こんなに変わるものか?

おれは鳥肌がたった。女の憤り、やるせなさがそこにあった。他の人は気づいていないようだが、何回とこの曲を聴き、何回とささゆりの演奏を聴いてきたおれにはわかる。まるで、ささゆりが曲のイメージを喰っているようだ。

それにしてもささゆりらしくない。曲を自分の感情に持つていくことは珍しくないが、それは大抵楽しいほうに持つていかれる。先ほどからの行動から見ても、なにかあったと感じずにはいられない。また、マリの行動も気になるところがある。二人の変化が、なにかしら関係がある気がしてならない。

ささゆりが心配だ……。幼馴染としても、想い人としても。

学校から帰り、自宅でケイタイを開く。結局学校でささゆりと話す機会は得られなかった。だからおれは、ささゆりに電話してみることにした。

しかし、いざ電話するとなる緊張してしまう。迷惑じゃないかな。そっとして置きべきなのかな。そんな弱気を振り払い、おれはボタンを押した。

第9が流れ、しばらくしてささゆりの声が曲をとめる。「もしもし、ミズキ? どうしたの?」

電話の向こうの声に顔が赤くなる。見えてなくてよかったと思う。「ああ、今日暗かったなーって思って。なんかあった?」

「あ、いや。大した事じゃないんだけどね。ちょっと、変なことになるっちゃって」

「どうしたんだ？ おれで良ければ、話聞くけど」

「ありがとう。ミズキも関係者だから言うよ」

おれが関係している？ いったい何のことだろう。おれは電話に集中した。

「昨日、一緒に帰ったじゃん？ それ、見てた人がマリちゃんに教えたいみたいで……。マリちゃんに、ミズキを取らないでよ、って言われちゃって。ごめんね。もつと考えて行動しないといけない」
電話越しに、ささゆりが弱々しく笑ったようだった。一方おれは軽く混乱していた。ささゆりと帰ったのが、こんなことになるなんて。マリがそんなこと言うなんて。……。まだマリはおれを好きでいるのか？

正直、おれはマリをそこまで好きではなかった。あまりにしつこく言い寄ってくるので付き合っただに過ぎない。付き合っただから、おれはそんなにマリを気にせず、デート等も全然行かなかった。やがてマリもおれから離れていき、おれたちの仲は自然消滅したのだ。いまさらマリは何を言っているんだろう？ 男のおれにはよくわからない。

とりあえず、考えるのはいつでもいい。悔いているささゆりになにか言葉をかけないと。

「気にすんなよ。マリにはなんか言っておくからさ。元気出せ」

「わかった。そもそもマリちゃんが心配するような仲じゃないもんね。私たち」

その言葉に少し傷つく。間違っただことは言っていないんだけど。心が寂しい。だが、残念なことに自分はそういうことに慣れている。おれは言葉を続けた。

「そうやってマリにちゃんと言っておくよ」

うん、ありがとう。いいよ、じゃあまた。ばいばい。

自分で認めるとはつらいことなのだな……。電話を切りつつ、

ため息をつく。進展のない、この関係。打ち破るには、行動しかないとわかってはいるのに。

このままでもいいと思う自分がいるのは気づいている。ずっとそばにいられる。見守っていける。それもありなのかもしれない。だが、ささゆりが誰かとどこかに行ってしまうのが、果たしておれに耐えられるのか・・・？

次の日、下校時刻。階段下で、おれはマリと対峙していた。別に、教室でも良かったのだが、これ以上のうわさは立てたくなかった。

「マリ、もう付き合っていないんだから、おれのことでなんか言うのをやめろよ。その、おれも悪かったとは思うけど、ささゆりは？幼馴染？なんだから・・・」

マリがむっと頬を膨らます。

「幼馴染って、ほんとに思ってるの？ あの子は」

お、思ってたなかったら嬉しい、なんて言っている場合ではない。

「そくに決まってるだろ？ 小さい頃からずっと腐れ縁だったんだから」

「何よ。あたしの知らないミズキをあの子は知ってるって言いたいの。確かにそうかもしれないけど、それでも、あたしはミズキの・・・」

「元カノ。だろ」

マリが黙る。だが、マリが言おうとしたことはもうウソになってしまうだろう。おれはマリから目を逸らさなかった。マリは俯いた。悪い気はするが、それでもいつかはけりをつけなければならぬのだ。

おれのためにも。もちろんマリのためにもだ。

「ごめん。そうだよな。もう、あたしはミズキの彼女じゃないもんね。うん・・・」

マリはおれから踵を返し、そのまま立ち去った。おれも部活に行こうと、廊下に出たところではったりささゆりと会った。

「あ、ささゆり。言っておいたから、マリに」

「うん。やっぱりマリちゃんに悪いことしたかな」

「しょうがないよ。おれがマリのこと好きになれないんだから」

十五歳で恋について語れるとは思わないが、やっぱりお互いに好きになれなければ、それは無理だと俺は思うのだ。

「なにいつてんの、ミスキ。ミスキって気障だよねえ」

ささゆりに笑われ、おれは頬が熱くなるのを感じた。恥ずかしい。別にいいだろ。気障でも」

「そうだね。それがミスキなんだし、私は気障でも構わないよ」

さっきの言葉より恥ずかしい。心臓が高鳴る。友達として言っているのはわかってるのだけど、それでもちよっと期待したくなるじゃないか！

「おれ、部活行かなきゃ！じゃ」

「う、うん！がんばってね」

おう、と手を挙げて答える。あんな風にかんばつてと言われたら、頑張るしかないじゃないじゃないか。

そんなことを思いながら、少し成長した気がするおれは廊下を走るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9819z/>

ささゆり物語

2012年1月6日16時48分発行